明治の暗黒

略奪

佐賀 潜

●明治の暗黒

略奪

佐賀 潜

講談社

略奪〈明治の暗黒〉

© 1966
SEN SAGA

四九〇円

佐賀潜

発行者　野間省一

発行所　(株)講談社
東京都文京区音羽三ノ十九
電話・東京(九四二)一一一一
振替　東京　三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷(株)
長野市西和田四七〇

製本所　(有)大光堂
東京都文京区西青柳町一三

第一刷　昭和四十一年四月十日

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

第一章　慶応四年五月の東北　5
第二章　奥羽戦争と銅山　36
第三章　鍵屋茂兵衛と大阪　63
第四章　岡田平蔵の謀略と銅山　92
第五章　南部藩の処分と鍵屋　116
第六章　岡田平蔵と井上馨　141
第七章　鍵屋と伊勢平と二人の女　164
第八章　七十万両の罰金と金策　197
第九章　鍵屋の借財と弁済金　223
第十章　大蔵省裁定の裏側　247

装幀　森下年昭

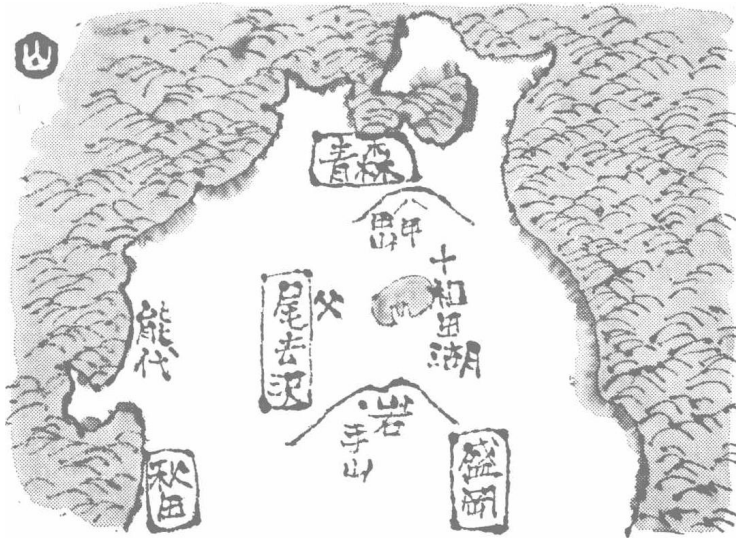
装幀写真　山口真治

さしえ　山崎百々雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

略奪

明治の暗黒



第一章　慶応四年五月の東北

一

東北の春はおそい。

旧暦の五月だというのに、岩手山の頂きに雪が残り、雄大な八幡平の山波は、長い冬眠からようやくさめ、浅みどりの尾根をうねらせている。空はあくまで青く、ひとひらの雲も浮かんでいない。

八幡平の山波が、北方へなだれるところ。米代川の流れをはさんで、赤肌の台地が、えんえんとつづいている。標高二、三百尺と思える台地は、一本の樹木もなく、春きたる息吹きすら感じられなかった。

この台地は、南部領鹿角郡、尾去沢銅山である。ふもとに尾去沢部落があり、銅山で働く人々が、この部落に住んでいる。軒をつらねた商家には、食糧や衣類、雑貨がならび、金工や大工が、連れ立って坂道をのぼっていく。その歩行者たちを追い立てるように、軍装した騎馬隊や、砲車を曳く兵士が、砂塵を巻いて走る。

鉄砲組の一隊が、隊伍をととのえ、銅山めがけて、

速足で行進していく。荷駄車が、兵糧や弾薬を満載し、通りすぎる。部落の人々は、息を殺し、あわただしい兵馬の動きに眼をみはる。

馬にのった商人風の男と、十六、七の小娘が、坂下の坑木置場の前に、馬首をそろえ、軍列の通過を見送っていた。結城つむぎの着物と羽織姿で、尻をはしょり、腰に小刀を差している男は、三十八、九歳の中年で、日焼けしたような顔は、常人より大きく、鼻梁がほとんどないといっていいくらい、鼻が低い。一文字に結んだ唇は部厚く、太い眉毛は、ぴんとはねあがり、二重瞼の眼は、やや充血していて、射るような力があった。

男は、江戸日本橋の商人岡田平蔵である。江戸というより、大阪商人といっていいくらい、数年前から、大阪淡路町に支店を構え、そこに住みついていた。

「だんさん、いくさ、はじまるだべか」

同行の小娘が、馬上から声をかけた。南部なまりの、土臭い声だった。

「どうやら、戦争になるらしいな。無益ないくさだがね」

岡田は、小娘の顔を眺めた。

「おら、いくさ、大きれえだ」

女は、びっくりするような大声を出した。小娘は、照井はなといい、岡田が、旅のゆきずりに、一夜の宿をとった旅籠で、十四両二分の金貨で、買い取った女である。

「誰だって、好きで戦争をする奴はいないよ。仕方がないのさ」

「どっちが、勝つだべか」

「さあ、そりゃ判らんな。けどな、天朝さまの軍隊に刃向って、勝てるはずがないだろうよ。困ったことだ」

岡田は、そういいながら、引っきりなしにつづいていく隊列を睨んだ。〈困ったことだ〉といったに拘わらず、その眼は、ぎらぎらと光り、口元に微笑さえ浮かべ、兵馬を睨んだ。

「おら、山さいぐの、やんたな」

「なぜだい」

「おんかねえだ」

「けど、一渡新平さんに、会えるかもしれないぞ」

はなのまん丸い眼が、うごいた。岡田は、眼ざとくはなの心の動きを読み取った。一渡新平は、南部藩の軽輩の武士である。その男がはなの心の中に、なんらかの影を染めていることを、岡田は見抜いていた。彼はだまって、坂の上を睨んだ。

数日前――。

岡田は、秋田藩の横手から、南部領和賀郡へ入ってきた。東北各地で、生糸を買い占めるためだった。

岡田平蔵は、江戸幕府の勘定奉行の用人だった田中

三郎平の子である。子供の頃、江戸日本橋の金物問屋伊勢平こと岡田平作に養われ、その養子となった。養父が死没すると、神奈川や大阪に支店を持ち、米の仲買や、生糸の取引を、手びろくやっているうちに、維新の動乱期に遭遇した。

慶応三年十月十四日、十五代将軍徳川慶喜は、朝廷に対し、大政奉還の上表を提出した。翌慶応四年四月十一日、江戸城の授受が終ると、幕府が、外国へ注文した軍艦、小銃、大砲等が到着した。

外国商社は、新政府に対し、これらの代価を、洋銀で決済しろ——と申し入れた。洋銀とは、メキシコドルである。天皇を中心とした新政府に、ドルの用意はなかった。

その頃、新政府の徴士で参与であった由利公正は、御用金穀取扱掛として、財政を担当していた。由利は、岡田平蔵を呼びよせ、「東北方面の生糸を、買い占めてくれ」と、たのんだ。

由利の考え方では、買い占めた生糸を、外国商社に売り払い、メキシコドルを得ようとするにあった。

由利公正は、越前藩福井の士族で、初め、三岡八郎と名のっていた。彼は、京都に新政府ができると、先ず、軍資金の調達にとりかかった。由利が、金集めに困っているとき、一面識もない商人岡田平蔵が、訪ねてきた。

由利は、岡田の名を知らなかった。が、側近の部下に、岡田を知っている者がいたので、その者の助言により、由利は、岡田と会った。

「由利さん、商人から金を集めなさい。どうせ、新政府は、大きく基礎をかためていくでしょう。政府は、御用商人の出入を、ゆるさねばならなくなります。今、軍資金を寄付した商人には、優先的に、後日、特権を与えてやればいいわけです。彼らは、先をあらそって、応分の寄付をするでしょう」

由利は、岡田の建言にうなずき、そのすぐれた識見におどろいた。彼は、豪商の間を駈けずりまわり、寄付をたのんだ。このとき、資金集めの世話役を担当したのが、現在、東京銀座四丁目に店を構える鳩居堂の三代前の当主、熊谷直孝である。

その結果、三井、住友、鴻池はじめ、京大阪の豪商たちが、こぞって寄付をした。三井は、金貨二万両を出し、たちまち、三百万両以上の資金が集った。

岡田は、自分でも千両を出し、盛岡の豪商鍵屋村井茂兵衛は、五百両を寄付している。これらの金が、官軍の東征資金になったのである。つまり岡田平蔵は、明治新政府樹立の裏方として、大いに貢献してきたわけである。

慶応四年正月三日、鳥羽伏見の戦争で、幕軍は、大敗北に終り、将軍徳川慶喜は、大阪天保山沖から、開陽艦にのって、江戸へ帰った。正月七日になると、仁和寺宮を征討大将軍に任じ、「慶喜追討」の勅旨を出

した。

征討軍は、軍を三方面に分け、東海道、東山道、北陸道から、江戸へ攻めのぼった。四月十一日、江戸城は、無血開城となったが、二千の彰義隊員が、上野の寛永寺に立てこもり、反攻の気勢を上げていた。

岡田平蔵が、南部領へ入りこんだ頃は、まだ、彰義隊との一戦がはじまっておらず、奥羽の諸藩は、勤皇か佐幕か、去就に迷っていたのである。

軍列が切れた。

「さ、そろそろ出かけてくれ」

岡田は、二人の馬子に声をかけた。その声には、凛とした張りがあった。二頭の馬は、馬首をそろえて動きだした。岡田は、坂道の途中から、後ろをふりかえった。ふと、誰かが尾けているような考えが、ひらめいたからだ。

湯瀬の宿を出て、花輪の町端れまできたときも、同じような不安を感じた。道が二又になっていて、右は花輪、左は尾去沢――と字をきざんだ道標の前まできたとき、二人の武士が、半町ほど後ろから、歩いてくるのに気がついた。

岡田は、ふと〈尾けているんだな〉と思った。が、〈まさかそんな馬鹿なことがあるはずがない〉と否定した。相手が、武士だったからである。南部藩の武士たちは、戦争さわぎでいきり立っている。一介の生糸商人に、なんの恨みを持つはずもない。買い占めた生糸を、外人商社へ売り払い、新政府のため、ドルを掴もうとしていることなど、辺境の東北の地では、誰一人、知るはずがない――と考え、二人の武士を、尾行者ではないと、思い直したのだ。

が、今、坂の途中から見おろすと、たしかに、花輪の町端れでみた二人の武士が、依然として、半町ほどの間隔をおいて、坂をのぼってくる。岡田は、〈変だな〉と思いながら、眼をみはった。二人の武士は、岡田の視線を知ってか、急に商家の軒下へ駈けこんだ。二人とも、袴のもも立ちを取り、襷をかけ、鉄砲を持っていた。

「少し、急いでくれ」

岡田は、やや震え声で馬子に命じた。馬は速足となった。坂道は、勾配が強くなり、左側の崖下に、幾つもの用水池が、汚れた水をたたえ、右側は、赤ちゃけた山肌がなだれ、樹木は全くなく、ところどころに、草が生えている。

「困ったぞ」

岡田が、呻るようにいった。

「二人のさむらい、だんさんを尾けてんのけえ」

と、はなが、憂いげな声をかけた。

「あんたも、気がついていたんか」

「んだ。おら、しんぺえになってきただ」

岡田は、答えず、はなの顔を見まもった。岡田が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

照井はなを、尾去沢銅山見学に同行したのは、誰かの眼を外らすためだった。尾去沢銅山は、南部藩の御用商人、鍵屋村井茂兵衛が、藩庁から産銅の販売を引受けている山だった。が、維新の大動乱に際し、東北列藩の動向は、勤皇か佐幕か、まだ、はっきりきまっていない。いずれにしても、新政府が、全国を統一することは、まちがいない。そうなったら、藩領となっている全国の鉱山は、従来どおり、各藩の経営にまかせておくはずがないだろう。

政府が、大きな発言権を持つだろうし、鉱山業は、産業の基本となるものだから、監督権を発動してくるだろう。その際、政府の要路に取り入り、経営権を掴めるかもしれない。岡田のねらいは、ここにあった。

岡田は、その時の準備のため、銅山を調べておきたかった。生糸の買い占めに大阪を発つ前、村井茂兵衛に会い、買い占めに協力してくれ——と頼んだ。

「鍵屋さん、実は、天朝方の御用で、東北方面へ、生糸の買い占めにいきますが、盛岡のお店の方へ、よろしくお伝え置きねがいますよ。南部領で、生糸を集めるとすれば、盛岡の鍵屋さんの協力を得なければ、できませんからな。もちろん、資金は豊富ですから、損はさせません」

村井茂兵衛は、二年前から、大阪の瓦町に鍵屋の支店を持ち、そこに移り住んでいた。岡田の店は、淡路町だから、ごく近くの隣町で、たがいに取引もあり、顔見知りの仲だったのだ。

「さっそく連絡を取っておきましょう。盛岡の店は、支配人の沢田忠兵衛が、取り仕切っていますから、沢田と会って下さい。けど、天朝方の御用——ということは、口外せん方がいいでしょう。値上りもするでしょうし、東北は、なにぶん辺境の地、新時代の到来を、かたくなに拒否するやからが、たくさんおりますからな」

「ということは、うっかりしてると、わしのいのちが、あぶなくなる——という意味でしょうな」

「京大阪でも、外国商社と取引する商人が、何人も、浪士の襲撃をうけていますからな。あんたも、神奈川で、経験ずみだし……」

岡田は、村井にいわれたとおり、浪士におそわれたことがあった。

神奈川港が、安政六年に開港されると、横浜は、貿易の中心地になった。後年、足尾銅山を経営し、遂に、古河財閥の基をきずいた古河市兵衛は、京都の糸商小野屋の番頭として、神奈川に赴き、盛んに生糸貿易に手を出していた。

〈生糸の相場は、横浜からおこる〉

と、いわれているくらい、神奈川における生糸相場の変動は大きかった。国内は、維新の動乱騒ぎで、需要が減り、相場は下落の一途をたどっていたが、神奈川へ持っていけば、必ず儲かった。一梱包で、利幅が

三十両から五十両もあったのだから、貿易商人が集ったのは当然である。
が、京都の老舗小野屋は、儲かる横浜貿易を禁じていた。尊皇攘夷の思想が、全国的に吹きまくり、外人と取引する商人が、浪士の襲撃をうけていたからだ。
が、古河は敢て、神奈川貿易を強行した。岡田平蔵は、古河と組んで、大いに生糸貿易をやった。
古河は、襲撃にそなえ、腕の立つ浪人を雇い入れ、たえず護衛をつけ、居所を転々と変え、浪士の眼をくらましていた。
ところが岡田は、大胆にも大手をふって、駈けまわっていた。岡田は、とうとう、浪士の一団につかまり、野毛山下の浪士の巣窟に監禁されてしまった。
岡田は、斬られるものと覚悟した。岡田は、閉じこめられている物置小屋へ、朝晩、めしを運んでくる若い下女風の女を手なずけ、辛くも脱出に成功した。
この話は、たちまち、商人仲間にひろまった。商人たちは、他人事と思えなかったからである。村井茂兵衛も、この噂話を聞いていたので、岡田に注意を与えたのであろう。
「ご注告、ありがとう。盛岡の沢田さんにも、天朝方御用――だけは内密にねがいます。ところで、鍵屋さん、あなたが請負っている尾去沢銅山……あちらへ行ったついでに、いっぺん見てきたいと思ってますが」
岡田が、さりげなく切り出すと、茂兵衛の顔が、急に引き締ってきた。眼つきがけわしくなり、口元がゆがんだ。
「鍵屋さん、わしは、どこか一つ、銅山をやってみたいと思っています。近いうちに、別子銅山も見てくるつもりです。日本には、まだまだ、眠っている銅山がたくさんありますよ。それを開発してみたいのです。そのときの参考のため、尾去沢を見学しておきたいだけです。沢田さんへ、連絡のついでに、わしの見学を、おゆるしねがいたい――と、お頼み置き下さい」
岡田は、茂兵衛の顔色をうかがいながらいった。
「どうしてもと、いわれるなら、手紙で知らせておきましょう。が、なるべくなら、行かんで欲しいな」
「と、いいますと……」
「南部藩は、佐幕色が強い。天朝方の御用商人のあんたに、万が一のことがあると、銅山を取り仕切っている鍵屋の責任となりますからな」
岡田は、茂兵衛の腹の中を見抜いた。〈鍵屋は、わしの意図を看破してる。わしが天朝方の高官と連絡があり、どさくさにまぎれ、尾去沢銅山を入手しようとしていることを察知し、見学を拒んでいるんだ〉
岡田は、南部領へ入ると、盛岡の紺屋町、中津川のほとりにある鍵屋の店を訪ね、支配人沢田忠兵衛と、生糸の取引をやった。沢田は、この取引に協力的だった。が、取引がすんだ後で、尾去沢銅山見学の話を持ちだしたとき、沢田も、茂兵衛と同様、手の裏を反す

ように、渋面をつくった。昨日のことである。
「沢田さん、明朝、お山へいってみたいが、おゆるしをいただけないか。もちろん、わしが、将来、銅山でも経営するようになったときの、参考にしたいからですよ」
岡田の言葉が、終らぬうちに、沢田は体を硬くし、眉間に縦皺をよせ、膝の上にそろえていた手を握りしめた。
「大阪の主人からも、連絡はありましたが、できるなら取り止めにしていただきたい」
「なぜかな」
「お山は目下、いくさ騒ぎで、殺気立っています。二千の軍勢が、お山を中心に集まりつつあります。まちがいでもあると……」
「わしは、生糸を買いにきた商人ですよ。勤皇も佐幕もありやしない。銭を儲けりゃいいんだ。そのわしに、南部の藩士たちが、なんの恨みがあるというのかね。第一、わしがなんのために、生糸を買いにきたか、南部領には、知っとる者は一人だっておらんはずだ」
「あんたが、それほどまでにいうなら、強いて、止めだてしません。けど、何が起っても、鍵屋としては、一切、責任を持ちませんから、そのおつもりなら……」
「鍵屋さんには、迷惑はかけない。わしは、鶯宿で拾った小娘を、いっしょに連れていくつもりだ。女連れなら、武士たちも、疑いも持たんだろうし、まさか、襲うこともせんだろうから」
岡田は、照井はなを同行しようと考えていた。はなは、領内の娘だし、その娘といっしょなら、自分の姿を見られても、行きずりの旅人として、見逃してくれるにちがいないと、見当をつけていたのだ。
岡田とはなの馬が、坂道をのぼり切ったとき、坂下から、馬をとばしてくる男があった。馬のたて髪が風にとび、馬上の男は姿勢を低くし、風をはらんだ袂をなびかせながら、近づいてきた。男は、岡田の手代銀八だった。銀八は、昨日、岡田といっしょに、盛岡の鍵屋まで出かけ、生糸取引清算のため、盛岡に残っていた。
銀八は、岡田の前まできて、馬をとめた。
「旦那、あっしはゆんべ、盛岡の宿に泊りましたが、その宿で、若侍たちの噂を耳にしたんで。旦那を斬る——といってるそうです。その、肴町の宿屋は、今度のいくさで、かき集められた人足たちの旅宿になっていまして、酒を呑んで、気焔をあげていました。あっしは、そいつらの酒の上の話を、耳にしたんですが……大阪の商人岡田平蔵というやつが、天朝方の鉄砲や大砲を買い入れるメキシコドルを稼ぐため、生糸の買い占めにきている。さむれえたちが、ぶっ殺すといってるそうだ——と、話をしてました。それで、今朝、起きぬけに、馬を借りて、とばしてきたわけです。旦

那、すぐ山を下りて下さい」
銀八は、呼吸を荒げながらいった。おでこの額から汗が噴き出し、頬骨のとがった顔が、硬わばっていた。
岡田は、その顔を見まもりながら息を飲んだ。坂下へ眼を転じた。が、二人の尾行の武士の姿は見えなかった。
「だんさん、湯瀬へ戻るべ」
と、はなが声をはずませた。
「旦那、戻った方が……無難と思いますが」
銀八が、声をふるわせた。岡田は答えず、赤い山肌を睨んだ。採掘した残石の山のようだった。銅鉱を熔解した残石であろう。それが、長い年月の間に、積み重ねられ、巨大な山塊をなしている。
二、三町先に、まるで陣屋のような木柵がみえ、その向う側に、詰所風の建物が見える。台地は、奥の方でひろがりをみせ、熔鉱炉らしいやぐらが、幾つもそそり立ち、黒煙が青空を覆っている。
岡田は、この山の中に、銅鉱が、無限に埋まっているように思えた。〈掘ればいいのだ。無から有を生ずるのだ。商人は、品物を右から左へ動かすだけだ。その中間に立って、利益を掴もうとする。儲かる時もあれば、損をするときもある。また、品物がいつでもあるとは限らない。欲しいと思っても、品物が他の商人に、買われてしまうこともある。不安定だ。が、地下の鉱石は、決して逃げることはない。掘りさえすれば、出てくる。いささかの不安もない。銅山を欲しい。なんとしても手に入れてみたい〉と、岡田は考えた。
「ここまで来たんだ。のぼってみよう。南部藩のさむらいたちが、わしを狙ってるというが、誰かが、そんな噂をばらまいているのかもしれん。今、山をみておかねば、なかなか機会は掴めそうもないな。銀八、おはな、のぼるんだ」
岡田は、強い語調でいいきった。三人の馬が、動きだした。銅山入口の、大きな板扉が、観音開きにあいていた。数人の番卒が、詰所から出てきて、進路に立ちふさがった。
「わたしは、大阪の商人岡田平蔵だ。今回、盛岡の鍵屋さんと取引があって、ご領内までまかり越した。旅の思い出に、尾去沢銅山の盛業をみせていただくため、雇人たちを連れ、参ったわけです。大阪の村井茂兵衛どのから、見学のおゆるしを得ています」
岡田は、張りのある声でいったが、言葉の途中で、馬を下りた。詰所の中から、商人風の三十がらみの男が出てきた。
「沢田さんから、聞いておりますだ。てまえは、鍵屋の手代の金兵衛です。詰所で、お休み下せえまし」
金兵衛と名のる男は、ことさら笑顔をつくりながらいった。岡田は、銀八とはなを残したまま、詰所へ入

った。
　数人の手代風の男が、そろばんをはじいたり、帳づけをしていた。板でかこっただけの仮小屋で、入ったところが五坪ほどの土間になっていて、その奥に、十畳の座敷ができていた。土間の真ん中に、固定した四角い机があり、その三方に、板でできた腰掛けがあった。岡田は、金兵衛と向き合って、腰を下した。
「岡田さん、ここでお帰りねげえてえんでがす。これから奥へいけば、どんなことが起るか、判んねえんで。もしものことがあると、おらたちの責任になるだ」
　金兵衛も、沢田と同じように、入山を拒否した。
「金兵衛さん、商人は、商売にいのちをかけているんだ。よしんば、山で殺されたって、本望じゃないかな」
　岡田は、微笑を浮かべながらいった。
「すると、岡田さんは、このお山に、なにか野心でも、あんかねえ」
　金兵衛は、出っ歯の口元に、いやしい笑いを浮かべた。岡田は、その口のきき方に、腹が立った。が、金兵衛が、どんな言葉を吐こうとも、事実はそのとおりだった。
「金兵衛さん、ま、そんなとげのあることをいいなさんな。わしは、銅山の経営をもくろんでいる。けどな、なにもこんな遠い尾去沢までやってきて、山をやろうとは思ってはいないよ。やるなら、四国の別子銅山さ。だから、参考としたいだけだ。気をまわさんでくれ。お山をひとまわりしたら、さっさと帰るから、よろしくたのみますよ」
　岡田は、語気をやわらげた。
「どうしても――というんなら、すかたねえだ。まわってきたらよかっぺ」
　金兵衛は、とがったいい方をすると、そっぽを向いた。
「金兵衛さん、お山で働いている人数は、どのくらいだろう」
「全部の人口、三千人。男が二千、女が千人あまりだ」
　金兵衛は、頬をふくらまし、ぶすっとした返事をした。
「女一人の日当は？」
「一日、十五文」
「普請方（ふしんがた）の給金は？」
　普請方というのは、坑道を掘進し、水抜けや通気の工作をする者をいう。これは、大工と掘子の仕事である。
「なぜ、そんなことを聞くだね」
「別子を経営するときの、参考だよ」
「大工が、一日三十文、掘子が二十五文」
「坑道は、いくつあるんだね」
「八十……」

「金工の給金は？」
「出来高払い……寸甫は月一貫四百……」
寸甫というのは、作業の監督者である。
「出来高払いの割合は？」
「一升七百文……」
一升とは、米なら三斗五升に相当する鉑枡をいう。縦横各一尺七寸五分、深さ七寸五分の木箱一杯に、鉱石を入れた量が一升である。重さは、三十貫から三十六貫匁くらいあった。
「一年間の産銅量は？」
岡田は、たたみかけるように聞いた。金兵衛は、窓の外の山を眺めまわし、答えようとはしなかった。
「金兵衛さん、年間八十万斤ときいたが」
岡田が重ねて聞いた。
「ま、そんなもんだな。近頃は、諸物価が上ってるのに、粗銅の値段が安いんで……」
金兵衛は、これ以上答えたくないというように、口を噤んだ。岡田は頷くと、礼をのべて詰所を出た。金兵衛が、後を追うように、出てきた。
「やっぱど、山さ見るんかね」
「拝見させてもらいたいな」
「何が、おっぱじまったって、すんねえだ」
「決して、迷惑はかけんよ。さ、行こうか」
岡田は、銀八とはなに声をかけると、馬を急がせた。

〈粗銅の値段は、今は安い。が、必ず値上りする。新政府が、基礎をかため、全国を統一すれば、必ず、産業の振興策を取るだろう。銅や鉄の鉱業は、国の基本となる産業だ。輸出もはかるだろうし、銅を使った品物の製造も、活発となるはずだ。そうなれば、値上りは、まちがいない。百斤当りの相場が、三十両でも、銅山の請負人たちは、面白いほど儲かった。三十両が五十両となり、百両となることも、遠いことではないだろう〉
岡田は、熔鉱炉を眺めながら、そんなことを考えた。
熔鉱炉は、石を積み上げたもので、巨大な火葬場のような感じがする。木炭を敷き、薪材が積まれ、その上に鉱石が重ねられ、枯草で覆われると、火がつけられる。ごうごうたる音を立て、燃えている。真っ赤な焔がゆれうごく。
左手に沢があった。金場である。数十人の女たちが、採掘された粗石を、鉄槌で砕いている。砕かれた石は、笊に入れられ、水洗いされる。
岡田は、馬から下りると、ふたたび、熔鉱炉のそばまで歩いていった。熱気が、全身をつつみ、顔が焼けるほど熱くなる。石の塔全体が火となり、鉱石を熔かしている。
銅が熔けて、赤い湯となり、流れ出した。鉄製の樋を伝い、長さ二尺、幅一尺五寸、厚さ三寸の粗銅板と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com